

『運命の鍵開けます』

著:いおかいつき

ill:あじみね朔生

九条の姿は警察署内にいても、警察官には見えなかった。顔立ちは整っている部類に入るだろう。黒髪はきっちりと後ろに撫でつけ、銀フレームの眼鏡を掛けたさまは、エリートサラリーマンか高級官僚といったところだ。九条本人もそれは自覚している。ことさらに警察官には見えないように装おうとしているところもあった。

「野上警部補はどちらに？」

野上とは役立たずの課長に代わり指揮を執っている、刑事課で最年長の刑事だ。五十歳を超え、九条からしてみれば親世代だ。野上にしても息子のような年代の九条の下につくのが腹立たしいという気持ちがあるのかもしれない。

「今、会議室で第一発見者の話を聞いてます」

わざわざ野上が対応するということは、死体発見現場となった家の住人という以外にも何かあるのだろう。

九条は会議室に向かいながら、岩井からさらに事件の詳細を聞いた。

死亡していたのは志藤久美子、四十八歳。青酸性の毒物を飲んでの中毒死だ。発見したのは義理の甥にあたる川端隆史という二十二歳の大学生。不審だとする理由は発見場所が隆史の家の書斎であること、被害者本人が鍵を掛けて籠もったのだというが、合鍵がないというのは隆史の証言でしか確認できないこと、さらに毒物を飲んだ際に使用されたと思われる水の類がなかったことが挙げられる。

「それで君たちが部屋の中に入ったときには、既に志藤久美子さんは死んでいたというわけですね？」

ドアの開け放たれた会議室から野上の声が聞こえてくる。丁寧な言葉遣いではあるが詰問調だ。

九条は足を止め、外から様子を窺った。

室内にいるのは野上と花山という刑事が二人に、おそらく隆史と思われる青年とさらにもう一人いた。第一発見者が二人いたとも聞いていない。

「刑事さん」

もう一人の男がうんざりとした口調で言った。

「なんででしょう？」

「さっきからその質問、三回目なんだけど」

「ですから、確認を」

野上は平然と同じことを繰り返す。取り調べに用いる刑事の常套手段だ。何度も同じことを尋ね、供述に矛盾が出ないか確認している。

だが九条の視線は野上の態度にではなく、もう一人の男に釘付けになる。

九条の知っている彼の姿は制服でしかなかったから印象は違うが、間違いはないはずだ。

「新さん」

隆史が新のセーターの袖を引っ張り、小声で呼びかけた。

「なんだ？」

「警察が同じ質問を何度もするのは、供述に食い違いが出ないかを見てるんだって」

「よく知ってるな」

「ドラマで言ってた」

隆史はニコッと笑って野上を見る。

「ですよ？」

「そういうわけでは……」

作戦を言い当てられ、さすがに野上もバツが悪そうだ。

中に入るのは今がいい頃合いだと九条は判断した。

「失礼します」

九条は一声かけてから室内に足を踏み入れた。

「課長、お疲れさまです」

花山が立ち上がり頭を下げ、野上はおざなりに会釈だけをする。

「刑事課長の九条です」

九条は新と隆史に向かって軽く頭を下げた。

新はまったく九条に気づいていないように見える。それも納得だ。当時の九条は、いや今も新ほど印象的な男ではなかった。

「課長、第一発見者の」

野上は向かい側に座る隆史を手で指し示した。

「こちらが被害者の甥の川端隆史さん」

そう言って次に新を指して、

「そして、こちらが鍵屋の日向新さん」

ありふれた名前ではない。やはり間違いなかった。九条は表情には出さないものの激しく動揺していた。まさかこんな形で再会するとは思わなかった。

新が九条を覚えているとは思えない。名乗らなくてもすむのではないか。しかし九条が迷ったのは一瞬だった。万一、後で新の素性を調べられることがあれば、九条との接点に気づく者が出るかもしれない。そのときにどうして言わなかったと責められるのはまっぴらだった。

「日向新？」

九条は呟くように名前を繰り返し、聞き覚えがある名前だというふう演技した。珍しい名前だから覚えていただけだと思わせたかったからだ。

「課長、どうかされましたか？」

案の定、野上が問いかけてくる。

「彼は高校のときの同級生です」

九条のこの言葉に一番驚いた様子を見せたのは新だった。

「同級生？」

大きな声で九条に向かって尋ねてくる。

高校時代にこんなふう直接会話をしたことなどほとんどない。それくらい接点のない二人だった。

「西城学園で三年のときに同じクラスだった九条義臣だ」

新に対しては敬語で話す必要はない。むしろ同級生だと言っておきながら敬語にするほうがおかしい。九条は事実だけを簡潔に伝えた。

「九条って、あの鉄仮面の九条？」

さっきよりもさらに驚いた顔と声で、新は九条をまじまじと見つめる。

新の言葉に新と九条以外の全員が笑いを噛み殺している。九条はそれに冷たい視線を返しただけだった。

鉄仮面とは高校時代の九条のあだ名だった。面と向かって呼びかける者はいなかったが、陰でそう呼ばれていたのは知っている。誰が名付けたのかはよく覚えていないが、新の周囲に集まっていたうちの誰かだったはずだ。

「鉄仮面かどうかはともかく、その九条だ」

九条は無表情を崩さず、淡々とした口調で答えた。

妙な感情を込めるよりも、一切の感情を入れないほうが楽だった。

「ちょうどいいや。同級生のよしみでさ、もう話すこと全部話したし、帰らせてくんねえ？」

新が九条に笑いかける。

昔から笑顔の多い男だった。明るくて人に好かれる。自分とは正反対の男だと思っていた。

九条はすぐに答えられなかった。そんな九条に野上が振り返り、首を横に振って見せた。まだ帰らせるなということだ。

「残念だが、元同級生というだけではどうにもできないな」

九条は新に冷たくそう言うと、

「野上警部補、少しよろしいですか？」

野上を会議室の外に促した。

いくら九条を軽視していても階級は九条が上だ。あからさまに無下にはできない。野上がしぶしぶ立ち上がる。

野上を従え会議室を出た九条は、声の中に聞こえないところまで離れてから足を止めた。

「第一発見者を引き留めておくのはどういった理由からでしょうか？」

「岩井からお聞きになってるのでは？」

九条の背後には岩井がいたから、案内をしてくる間に説明くらいしているだろうと野上は読んでいた。

「野上警部補のご意見をお訊きしているんです」

重ねて尋ねる九条に、痺れを切らしたように野上が答える。

「自殺とは思えない点がいくつかあるからです」

「つまりあなたは他殺だと疑い、第一発見者の青年が犯人である可能性を考えているわけですね？」

「あくまで可能性ですが」

「可能性だけで長くお引き留めするのは感心しませんね」

「それは同級生への配慮ですか？」

野上がどこか馬鹿にしたように尋ねてくる。捜査に私情を交えるなんてとでも言いたげだ。あまりにも短絡的な思考に九条は呆れるしかない。

「日向がここにいる理由をまだ聞いてませんが？」

「鍵の解錠に呼ばれ、川端隆史と一緒に死体を発見したということです」

それで新のいる理由がわかった。新が鍵師なのだとさっき紹介された。サラリーマン

だと言われるよりは納得できる。

「そろそろ戻ってもよろしいですか？ 課長への報告はもっとはっきりとした事実を掴んでからと思いましたが」

だから報告しなかったのだと野上は言っている。言い訳にすぎないことはわかっているが、あえてそれ以上の議論を野上とするつもりはなかった。まったく効果がないからだ。刑事課には野上に味方する刑事はいても九条の味方はいない。

「あまり無茶な事情聴取はなさらないようお願いします」

「課長にご迷惑はおかけしませんので」

だから黙って見ている。野上のこの言葉にはそういう意味が含まれている。

九条は刑事課の自分のデスクに戻った。現段階での報告書を読み、上に報告しなければならない。それだけが九条の仕事のようなものだ。

まだ事件は起こったばかりで自殺か他殺かも判明していない。事実だけが簡単に記された報告書が九条の机の上にあった。直接報告してこないのが九条へのいつもの対応だ。

九条はそれに目を通した。九条がさっき見聞きしたことが書かれており、懐かしい名前もそこにある。

再会はしたものの、結局十年前と同じ、親しくない同級生で終わるだろう。それでよかった。

本文 p34～42 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>